

画集「山と人」 拝読評

2020/8/25 井上達男

山の楽しみ方にはいろいろある。計画段階から始めて実際に山に行き、下山後に報告をまとめる。およそこのようなステップが基本となろう。それに加えてスケッチや写真を趣味に加える山屋も多い。中には笛を山に持ち込んでテント場で静かなメロディを奏でる先輩もいた。私は山行の思い出に稚拙ながらもスケッチをすることが時々あるが、描くことはその山や山行の印象を長く記憶に留めることとなっている。

若き学生の頃、上高地の明神池で老画家がスケッチをされているのに出会った。私も明神岳のスケッチをやっていた。私が注目するのは登攀ラインをどう採るかが関心ごとなのでスケッチにはそれが現れる。老画家は私のスケッチを見て「なかなか鋭い描写だね。私には持ち合わせていない視点だ」との批評をいただいた。氏が翌日明神岳の中腹に登ってスケッチをされるので画材を持ち上げる手助けをした。その縁で氏が神戸で個展を開かれたときに招待され拝見に訪れた。森川画伯と言う山岳画では著名な方であった。貧乏学生で絵を買うことはできなかったが、一枚の槍ヶ岳のスケッチをいただいた。今も家の壁に掛かっている。

さて、著者山田健氏は本格的な登山家であり、神戸大学山岳会では良き協力者としてチベットの未踏峰登山にも同道した。登山技術はもちろん対外折衝や隊員たちの指導にも熱心に取り組む信頼のおけるパートナーであった。また、山岳会の運営では事務局長として10年間、会長であった私をよく補佐してくれた。

そんな著者が素晴らしい絵を描くことを迂闊にも長年知らずにいた。

この度発刊された著者の画集の何枚かは同じシーンを私と一緒に見ている山が対象になっている。たとえば pic.12/13 は 崗日嘎布山群のルオニイ峰(若尼峰 Ruoni Feng 6,882m) とロプチン峰(洛布青峰 Lopchin Feng 6,805m)で 2009 年の遠征隊がロプチンに初登頂成功後に訪れた峠からの雄姿が描かれている。深いチベットの澄んだ青空に屹立する両峰の神々しさに感動した瞬間が忘れられない。Pic.13 は pic.8 と pic.47 とともに我が鷲ヶ岳の山荘にデンと掲載されている。

クーラカンリやロプチン、バダリの絵は著者が実際に遠征隊の一員として深くかかわった山を描いている。遠征隊は何日もその山と対峙している。頂上を目指して未知なる山に登路を求めて苦闘する日々がある。深くかかわった体験から得られた感動が表現されているのがうかがわれる。

画集「山と人」はその名の通り山が主たる対象だが、人の姿が描かれている。解説に絵画が生まれた背景が書かれているが、山があり、そこで起きた出来事には必ず人が関係している。それが自然と人とのかかわりを表現していて絵に物語が込められていると思わせるのが奥深い。一枚と一緒にザイルを結んでクレバス地帯を通過している姿(pic.8)が描かれているが、それをじっくり見ると一人は私であった。その日のことが昨日の出来事のように思い出される。

他方、長い年月の登山活動の間には残念ながら遭難事故もあった。カラコルム・ロロフ
オンド氷河でのクレバス転落事故(pic.1)。御岳山での雪洞での死亡(pic.40)。中国雲南省・
梅里雪山・カワカブ峰の雪崩遭難(pic.18)。そして、富士山の吉田大沢滑落事故(pic.51)。崇
高なる峰々が描かれているが、背景を知るとこれらの絵には悲しい出来事が隠されていて、
鎮魂の心が込められていることがわかる。

ヨーロッパアルプスの絵はアイガーやモンブランなど、有名な山々が対象となっている
が、著者が夫人との旅行にてモチーフを得ている。長年身勝手にヒマラヤ登山などに人生
の多くを費やした罪滅ぼしの旅行だろう。明るい絵にはほのぼのとした仲の良い夫婦の風
が感じられる。眺めていると私もそろそろ家内と山を見る旅をするのも良いかな、と絵に
誘われる。

この書は登山家山田健氏の **biography** と言えよう。自ら描いた絵画で自分史を作成でき
るのは幸せなことだ。私費出版で限られた人たちにのみ鑑賞されるのだろうが、広く一般
の読者に提供されても良い作品だと思う。